

西部瀬戸内における 古墳時代後期土師器の研究

三 吉 秀 充

はじめに

西日本における古墳時代の土師器研究は、古墳時代前期の古式土師器を対象とした研究が中心であり、古墳時代中期～後期を対象とした研究は少ない（石野ほか編1991）。それを示すかのように、古墳時代前期以降の土師器編年が確立されていない地域も多い。この理由として、当該時期における良好な一括資料が少ないことに加えて、1960年代、陶邑窯において詳細な須恵器編年ができあがっており、須恵器編年を用いれば、遺構の時期決定が可能であったことも挙げられよう（田辺1966など）。また、土師器編年が示されている地域でも、個々の遺跡における編年案が示されているものが多く、そこで示された編年がどの程度の地域まで適用できるのか不明であるといった問題点も残されている。

そのような中、2000年代になり、古墳時代中期以降の土師器をテーマとした研究会やシンポジウムが盛んに開催されるようになった。特に2002年6月、佐賀大学で開催された第5回九州前方後円墳研究会『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』や2008年8月、山口大学で開催された山口考古学フォーラム第1回シンポジウム『山口県の古墳時代土器編年を考える』では、古墳時代中・後期の土器が研究の俎上に取り上げられ、九州各地および中国地方西部を対象として、県別あるいは旧国単位における土師器編年の提示や古墳時代中・後期における土師器研究の論点の整理が進んだ。また、西日本各地で土師器編年を中心とした研究成果の公開も行われ始めている（辻1999、亀田2003 a・b、田川2004、重藤2009・2010など）。

さて、本稿で対象とする西部瀬戸内地域の主要な平野の1つである松山平野の研究状況を見ると、いまだに古墳時代中期～後期の土師器を対象とした研究がほとんど行われていない（光江1993、栗田正1996、蔵本2001など）。この背景には、四国地域の古墳時代後期土師器を検討した亀田（2003b）が「この地域では竪穴住居内でセット関係がよくわかる例はあまり見ることができない。」と指摘し、さらに「6世紀前半段階の資料は良好なものを見いだせなかった。これは四国地域全域においても同様である。」や「6世紀後半になると住居資料は増加するが、セット関係がわかる良好な資料はみない。」と述べるように、良好な資料が少ないことが挙げられよう。このような現状の中でも、現時点で利用可能な資料を用いた編年案の提示といった基礎的研究は必要であろう。そこで、本稿では、西部瀬戸内地域の中でも松山平野出土資料を基に、古墳時代後期の土師器について、現状における編年案を提示し、特徴について述べてみたい。

なお、本稿は、前段階からの変化も捉えるため、田辺昭三（1966・1981）による須恵器編年TK23型式～TK47型式併行期以降からおおむねTK217型式の資料を対象とする。また、対象資料は、集落出土資料を中心として検討を行う。

1. 松山平野における古墳時代後期土師器の分類

松山平野における古墳時代後期の土師器を、以下のように分類する（図2）。

①壺形土器¹⁾

壺は直口壺（A類）と短頸壺（B類）とがある。

A類の口縁部は基部から上外方へ長くのび、胴部は球形を呈する。内外面ともにナデ調整である。調整は粗雑なものが多く、粘土紐の痕跡も見られる。口径約9cm、器高約10cmの小型壺（1）と口径約11cm、器高約16cmの大型壺（2）とがある。

B類（3・4）は、小型甕と区別が難しい。口頸部は大きく外反し、胴部は球形を呈する。口縁部の内外面ともに横ナデ調整、外面は刷毛目調整あるいは

ナデ調整、内面はケズリ調整あるいはナデ調整を施す。器高は13cm前後を測る。

②甕形土器¹⁾

甕は、まず把手が付くものと付かないものとに分類できる。把手が付かないものは、器高25～30cm前後の大型（A類）、器高20cm前後の中型（B類）、器高12cm前後の小型（C類）、A類よりも1周り大きな特大型（D類）に分類できる。サイズの違いの他に、器形などの違いからさらに細分できる。

A類は、胴部が長胴化したものが多い。A類は以下の5種類が見られる。

A1類（5・22・31・32）の口縁部は、内湾し、端部が肥厚するものである。胴部外面には粗雑な刷毛目調整を施す。特に肩部には、横方向に刷毛目調整を施す。内面には、刷毛目調整、ケズリ調整、ナデ調整を施す。

A2類（6・23・33）の口縁部は、く字形に外反し、端部は丸くおさめる。外面は刷毛目調整あるいはナデ調整、内面はケズリ調整あるいは刷毛目調整を施す。

A3類（7）の口縁部は、二重口縁を呈するものである。口縁部の内外面には横ナデ調整を施す。

A4類（24）の口縁部は、大きく外反するものである。器壁は厚ぼったく、粗雑な作りで、粘土帯や指頭圧痕が顕著に残る。

A5類（25・26）の口縁部は、胴部から緩やかに反転しながらのびる。口縁部周辺は横ナデ調整を施す。胴部内外面は刷毛目調整の後にナデ調整を施す。

A6類（39）の口縁部は、く字形を呈し、直線的に上外方へのびる。口縁端部は、面取り気味におさめる。胴部は卵形で、最大径は中位よりやや下部にある。胴部外面には刷毛目調整を施す。A1類の肩部外面に見られる横方向の刷毛目調整は見られない。内面は、口縁部から胴部上半部にかけては横方向の刷毛目調整、胴部中部から下部にはケズリ調整を施す。

B類は、以下の6種類が見られる。全形が不明のためA類となる可能性があるものも含まれている。

B1類（9・27）の口縁部形状は、A1類に共通し、口縁部が内湾し、口縁端部が肥厚するものが多い。胴部の長胴化があまり進んでおらず球形である。

外面は刷毛目調整、内面はケズリ調整である。

B 2 類 (28) の口縁部は、外反し、端部を丸くおさめる。外面は刷毛目調整あるいはナデ調整、内面はケズリ調整を施す。

B 3 類 (10) の口縁部は、二重口縁を呈するものである。

B 4 類 (34・40) の口縁部は、直立気味にたちあがった後、弱く外反する。胴部は球形を呈する。

B 5 類 (35・41) の口縁部は、大きく屈曲する。頸部はあまりしまらない。胴部外面には刷毛目調整を施す。

B 6 類 (36) の口縁部は、ゆるやかに外反する。頸部はあまりしまらない。胴部外面には刷毛目調整を施す。

C 類は、以下の 3 種類が見られる。

C 1 類 (11) の口縁部は、内湾し、口縁端部が肥厚するものが多い。胴部は球形である。口縁部の内外面ともに横ナデ調整、外面は刷毛目調整とナデ調整、内面はケズリ調整あるいはナデ調整を施す。

C 2 類 (12) の口縁部は、くの字形に折り返し、口縁部は短くのびる。肩部は張らずに胴部へと続く。外面調整は刷毛目調整あるいはナデ調整、内面調整はナデ調整を施す。

C 3 類 (37) の口縁部は、内湾気味である。肩部は張らず、頸部はあまりしまらない。外面は刷毛目調整を施す。

D 類 (8) の口縁部の形状は、A 1 類と同じく、内湾し、口縁端部が肥厚する。肩部には張りがある。肩部外面は刷毛目調整、内面はナデ調整である。

把手付甕 (13～15) は、やや丸みをおびた平底の底部からゆるやかに上外方へ開き、口縁部を短く折り曲げるものと直口するものがある。胴部には把手が 2 方向に付き、胴部外面には刷毛目調整を施す。

③ 椀形土器¹⁾

椀には、A 類～C 類の 3 種類が見られる。

A 類は、口縁部が強く内湾あるいは直立する。胴部との境は明瞭でない。口径約 10～11cm、器高約 5cm の小型 (16) と口径約 13～14cm、器高約 6cm の大

型（17）がある。調整は内外面ともにナデ調整である。

B類（29）は、口径約14cm、器高約4cmを測る浅い碗である。口縁部はやや外反気味にたちあがり、端部近くで直立し、端部は丸くおさめる。口縁部の内外面および外底面は横ナデ調整を施す。

C類（42）は、口径約12cm、器高約9cmを測る深めの碗である。底部は丸みをおびる。口縁部は内湾気味にまっすぐのび、端部を丸くおさめる。外面は縦方向に、内面は横方向に刷毛目調整を施した後、口縁部付近は内外面にナデ調整を行う。全体に器壁は薄い。

④高杯形土器¹⁾

高杯は大きくA類～D類の4種類が見られる。

A類（18）は口径に比して深めの杯部である。全形を知り得る資料がないが、口径約13cmを測り、口縁部は端部近くで外方へ折り曲げる。

B類（19・20）は口径に比して浅めの杯部である。口径16～18cm、器高12～14cmを測る。口径が20cmを超える大型のものも見られる。杯部の口縁部は直線的に開き、口縁端部は丸くおさめる。杯部口縁部と底部との境は屈曲し、外面には稜をもつものと稜があまくなったものがある。杯部内外面ともにナデ調整が基本であり、ミガキ調整、刷毛目調整も残る。脚柱部は中空で、脚裾部近くで外方向へ広がり、内面に稜をもつ。柱部内面はケズリ調整を施す。杯部と脚部は充填法で接合する。

C類（21）は、碗A類に脚台が付いたものである。口径約12cm、器高約8cmで、杯部は平底の底部から内湾して口縁部へとつづく。杯部の外面は刷毛目調整を施す。脚は湾曲気味に外下方へのびる。

D類（38）の杯部は碗状を呈し、脚柱部は中実で、裾近くで外方へ開く。杯部に柱部を付加法で接合している。口径約19cm、器高約17cmを測る。

なお、甑形土器¹⁾に関しては、良好な資料が少ないことから、今回、分類を行っていない。

2. 松山平野における古墳時代中期末～後期土師器の変遷

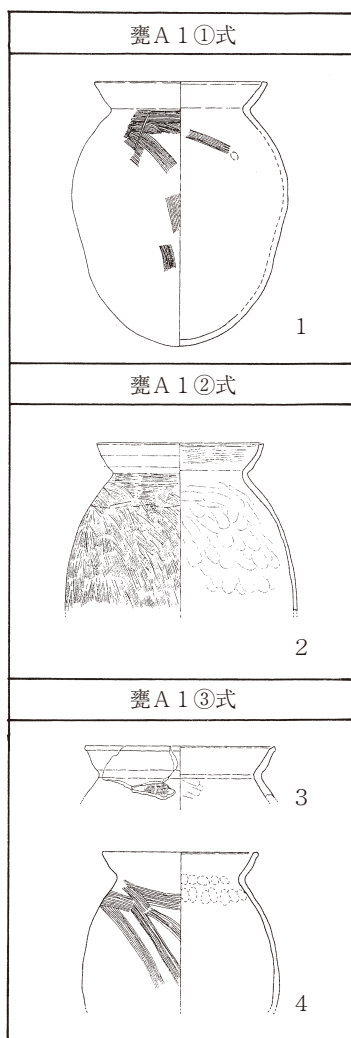


図1. 甕A1類の分類 (縮尺1/8)

- 1 : 辻町2次SX2、2 : 文京20次Ⅲ層、
3 : 桑原西稲葉4次SC283・284・285、
4 : 北久米浄蓮寺3次SB14

(1) 編年の基準

古墳時代後期の土師器には、壺、甕、椀、高杯といった器種が存在するが、すべての時期に継続して見られるものは少ない。また、良好な一括遺物も少ない。そこで本稿では、以下の通時的に見られる甕A1類を変遷の軸として古墳時代後期土師器の変遷について考えてみたい。

甕A1類は、口縁部から口縁端部の形状ならびに体部の形状から、甕A1①式～A1③式の3種類に分類できる(図1)。

A1①式の口頸部は、内湾気味で斜め上外方にのび、口縁端部は肥厚する。肩部にやや張りがあり、胴部最大径がある。胴部は長胴化が進んでいる。胴部外面には刷毛目調整を施し、特に肩部外面には横方向へ刷毛目調整を施す。口頸部内面は刷毛目調整あるいは横ナデ調整が施される。胴部内面には、指ナデ調整や刷毛目調整を施すものが多い。全体に器壁は厚く、刷毛目調整も粗い。

A 1 ②式の口頸部は、内湾気味にたちあがり、口縁端部は肥厚する。肩部の張りは弱くなり、なで肩である。胴部の長胴化はA 1 ①式よりさらに進むと同時に、肩部の張りが弱くなったことから、胴部最大径は胴部中位となる。胴部外面には刷毛目調整を施し、特に肩部には横方向へ刷毛目調整を施す。口頸部内面には、横ナデ調整あるいは刷毛目調整を施す。胴部内面の調整はケズリ調整を施すものもあるが、指ナデや刷毛目調整を施すものが多い。全体に器壁は厚く、刷毛目調整も粗い。

A 1 ③式の口頸部は中程で屈曲し、直立気味のものも見られる。A 1 ②式よりさらに張りのないなで肩で、胴部最大径のある胴部中位に向かって緩やかに続く。口径と胴部最大径とがほぼ同じものも見られる。また、口頸部内面と肩部内面との境に稜をなすものもあるが、緩やかである。胴部外面には刷毛目調整を施し、肩部には横方向へ刷毛目調整を施す。口頸部内面には刷毛目調整を施すものがある。胴部内面に板ナデ調整やナデ調整を施し、指頭圧痕も見られる。

以上で述べたように、大型甕A 1 類にはA 1 ①式～A 1 ③式が見られた。これらの3種類の大型甕のうち、A 1 ①式が、古墳時代前期から中期段階に残る布留式甕の影響を受けた在地甕に近いと考えられる。さらに口縁部は「内湾気味のもの」から「直立し屈曲したもの」へ、「肩部の張りがあるもの」から「なで肩のもの」へ、胴部最大径が「肩部周辺」から「胴部中位あるいは中位下部」へ、「口径より胴部最大径が大きいもの」から「口径と胴部最大径がほぼ同じもの」へという変化の方向性を想定すると型式学的に大型甕A 1 ①式→A 1 ②式→A 1 ③式への変遷を想定できる。

ただし、この型式組列はあくまでも仮説であり、検証が必要である。一括遺物による型式組列によって、仮説の検証を行いたい。前述のように資料の制約などから、同じ土師器の中で組列を確認できるものは少ない。そこで、大型甕A 1 類の各型式の組列と須恵器蓋杯の組列とで検証を行いたい。遺構における大型甕A 1 類の各型式と須恵器蓋杯の共伴関係をまとめたものが表1である。

表1 甕A 1 類と須恵器との共伴関係

遺構名	土師器			須恵器		
	甕A1①式	甕A1②式	甕A1③式	TK23・47型式	MT15・TK10型式	TK43～217型式
筋違C遺跡SB-2	○			○		
樽味遺跡3次SC02	○			○		
辻町遺跡2次SX2	○	○		○		
開遺跡1次SB1		○			○	
樽味立添遺跡1次SB9		○			○	
下苅屋遺跡3次SB5中～下層		○	?		○	○
文京遺跡13次SC-25	?	○	○		○	○
下苅屋遺跡3次SB6			○			○
祝谷アイリ遺跡SB1			○			○
桑原西稲葉遺跡4次SC-283・284・285			○			○

表1を見ると、良好な一括遺物が少ないことがわかる。前後の時期の資料が混入したと考えられる資料が多いが、遺構における共伴関係では、大型甕A 1 類と須恵器蓋杯の変遷に大きな齟齬はない。甕A 1 ①式はTK23～47型式、A ②式はMT15型式～TK10型式²⁾、A ③式はTK43型式～TK217型式前後の須恵器と共伴している。このことから、大型甕A 1 ①式→A ②式→A ③式の変遷を確認できた。

(2) 古墳時代中期末～後期土師器の変遷

前節で検討を行った大型甕A 1 ①式→A 1 ②式→A 1 ③式への変遷を基に、古墳時代中期末～後期を1段階～4段階に分けることが可能である。以下では、段階ごとに土師器の様相についてふれながら、土師器の変遷について述べていく(図2)。

① 1段階の様相

1段階は、甕A 1 ①式が見られる段階である。

当段階の資料としては、樽味遺跡3次調査SC02・SC05、辻町遺跡1次調査SX1、同遺跡2次調査SX2の一部・SX7、筋違C遺跡SB-2などある。

器種には壺、甕、甑、椀、高杯がある。

壺には、大型品は見られず、直口壺であるA類(1・2)と短頸壺であるB類(3・4)といった小型品のものに限られる。

次に甕である。大型品であるA 1～3類、中型品であるB 1・3類、小型品であるC 1・2類、特大型であるD類が見られる。また筋違C遺跡では把手付甕が見られる。

A 1類（5）の口頸部は、内湾気味で斜め外方にのび、口縁端部は肥厚する。肩部にやや張りがあり、胴部最大径部は、胴部中程よりやや上位にある。

A 2類（6）の口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。肩部にはやや張りがある。胴部最大径は、胴部中央よりやや上部にある。

A 3類（7）は、全形が分かる資料がない。A 1・2類と同様の形状を呈すると考えられる。

B 1類（9）の胴部は、長胴化が進んでおらず球形である。

B 3類（10）の二重口縁部はあまくなり、肩部の張りも弱い。胴部をみると、やや長胴形を呈する。外面には刷毛目調整が施され、内外面ともに指頭痕が残る。

D類（8）は、集落遺跡からの出土例は見られず、古墳出土品に見られる。全形を知り得る資料はないが、甕A 1類の体部と共通するものと想定される。

椀にはA類（16・17）が見られ、高杯にはA類（18）、B類（19・20）、C類（21）が見られる。

②2段階の様相

2段階は、大型甕A 1②式が見られる段階である。

当段階の資料としては、開遺跡1次調査SB 1、樽味立添遺跡SB 9、文京遺跡13次調査SC-14・SC-25、麻生小学校南遺跡第2次調査第2号竪穴住居址などがある。

器種としては甕が主体で、壺や高杯はほとんど見られなくなる。壺はA類の直口壺のみである。椀も量が少ない。甗も一定量あるが、全形がわかる良好な資料は少ない。

大型品であるA 1・2・4・5類、中型品であるB 1・2類が見られる。C類は不明である。D類は見られない。

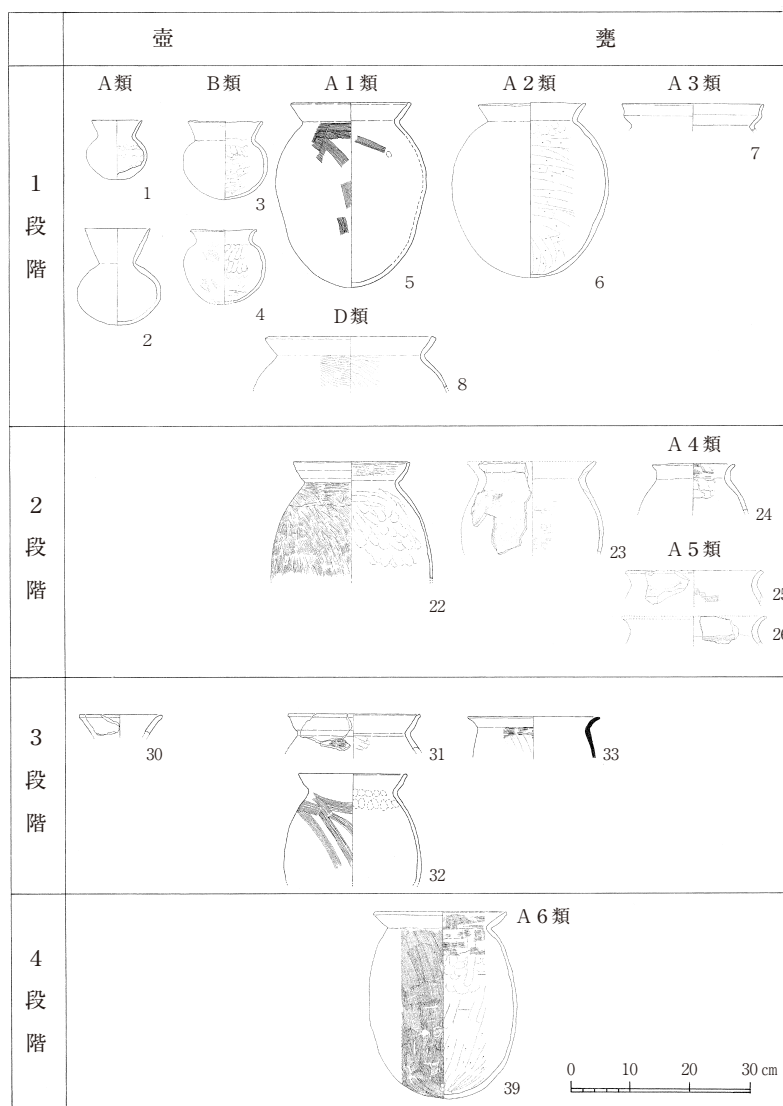
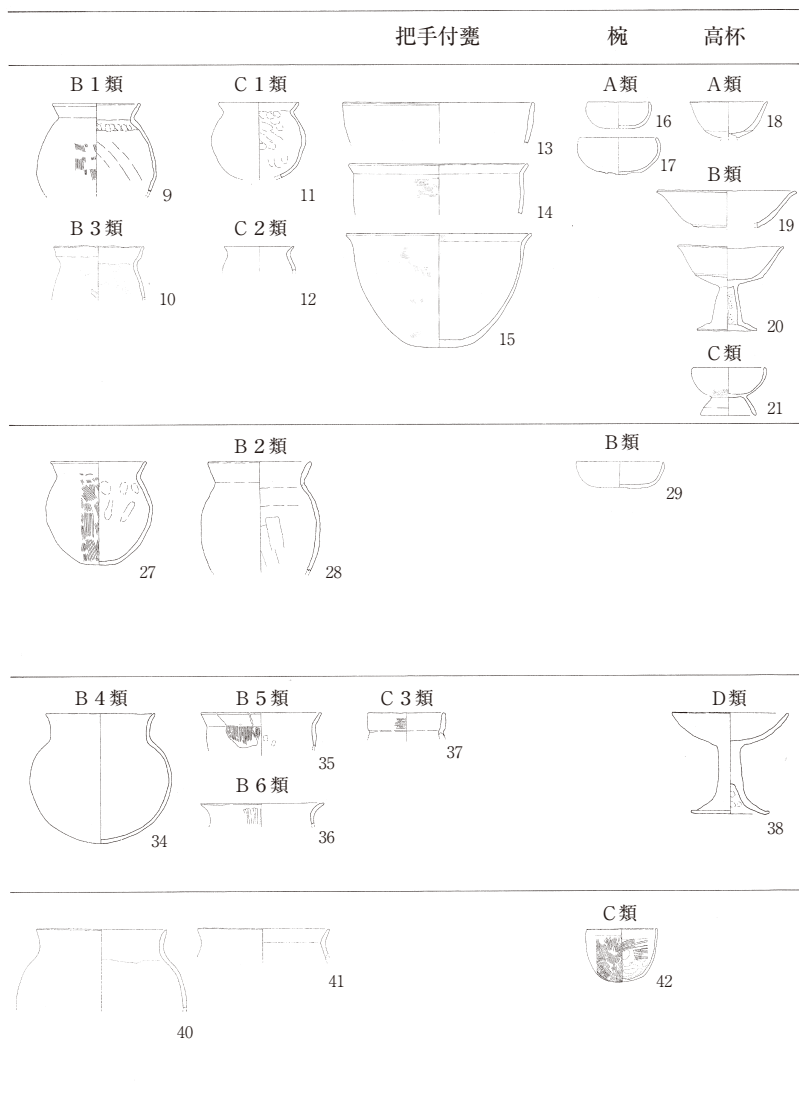


図2. 土師器変遷図 (縮尺 1/12)

1・2・12: 辻町1次SX1、3・4・6・18~20: 樽味3次SC02、16・17: 同SC05、5・9・辻町2次SX7、22: 文京20次Ⅲ層、23・25・26・29: 文京13次SC-25、24: 福音小学校構内原西稲葉SC283・284・285、32: 北久米浄蓮寺3次SB14、33: 樽味1次SR3、34: 麻生小学



11：辻町2次SX2、7・13～15：筋違CSB2、8：大池東3号周溝、10：文京13次SC-12、21：SB85、27：麻生小学校南2次第2号竪穴式住居跡、28：樽味立添1次SB9、30・31・35・37：桑校南2次包含層、36：開1次SB5、38：祝谷アイリSB1、39～42：樽味7次SX-29

甕A 1 類 (22) の口頸部は内湾気味にたちあがるが、前段階にくらべるとたちあがり急になる。肩部は張らないで肩である。

甕A 2 類 (23) の肩部は、前段階のものに比べて張りが弱くなり、調整も粗雑となる。

1 段階に見られなかった甕A 4・5 類が登場する。A 4 類 (24) の口縁部は、A 2 類に比べてさらに屈曲が強いものである。

A 5 類 (25・26) の胴部は不明であることから、球形の胴部を呈するB 類の可能性もある。また3 段階に下る可能性もある。

B 1 類 (27) の胴部は、長胴化せず球形であるが、胴部中程が大きく張り出す。底部はやや平底気味である。

B 2 類 (28) の口縁部は、外反し、端部を丸くおさめる。肩部の張りはあまりなく、胴部最大径は胴部中位にある。さらに胴部内面の上半部に施されるナデの範囲は広い。

椀ではB 類 (29) が見られる。椀B 類の口径は14cmと同時期と考えられる須恵器蓋杯の杯身の口径とほぼ同じで、器高もほぼ同じ数値であり、興味深い。

③ 3 段階の様相

3 段階は、大型甕A 1 ③式が見られる段階である。当段階の資料としては、開遺跡1 次調査SB5、下苅屋遺跡3 次SK1・SB6・SB5中～下層、桑原西稻葉遺跡4 次調査SC-283・284・285、樽味遺跡1 次調査SR3、祝谷アイリ遺跡SB1などがある。

前段階に引き続き、器種としては甕が主体で、壺や高杯はほとんど見られなくなる。壺は直口壺であるA 類 (30) のみである。椀も量が少ない。甗は一定量あると考えられるが、良好な資料は少ない。

甕には大型品であるA 1・2 類、中型品であるB 1・4～6 類、小型品であるC 3 類が見られる。

甕A 1 類 (31・32) の口縁部は、中程で屈曲し、ほぼ直立するものが多い。肩部は張らないで肩となり、胴部最大径は胴部中位にある。

A 2 類 (33) の口縁部は、短くなり、肩は張りのないで肩となる。全体に

器壁は厚くなり、最大径は胴部下半にある。内外面ともに刷毛目調整を施す。

次に中型品を見てみよう。甕B 1類の肩部の張りは弱くなり、2段階で見られた球形の胴部につながるものと考えられる。この段階から甕B 4類、B 5類、B 6類が見られる。

B 4類 (34) は、球形の胴部をもち、B 5類 (35)・B 6類 (36) の頸部は、しまりが弱く胴部も大きく張りださない甕である。

少量ではあるが、確実に小型甕であるC 3類 (37) が見られる。なで肩で、胴部は球形を呈すると考えられる。

高杯は、前段階までに見られなかった高杯D類 (38) が見られる。竪穴式住居跡内の竈から出土している。高杯の表面は磨滅しており、竈の支柱として使用された可能性が高い。

④ 4段階の様相

4段階は、大型甕A 1類が見られない段階である。当段階の資料として2002年4月～5月、愛媛大学埋蔵文化財調査室が発掘調査を行った樽味遺跡7次調査で出土したSX-29がある (田崎2004)。SX-29は、樽味遺跡7次調査I区で出土した自然流路SR-13の中に見られた土器だまりであり、弥生土器や石器に混じって須恵器・土師器が集中して出土している。須恵器は、TK217型式前後を下限とするものが出土しており、相伴して出土している土師器も同時期のものと推定される³⁾。

土師器には、甕と椀が見られる。甕には、大型甕である甕A 6類 (39) と中型甕であるB 4 (40)・5類 (41) とが見られる。

特に甕A 6の製作方法は、前段階までの製作方法と大きく異なることから、この段階で、土師器甕の製作方法に大きな変化が見られる。

椀には深めの椀C類 (42) が見られる。

3. 松山平野における古墳時代後期土師器の特徴

これまで土師器甕A 1類を基準として、古墳時代中期末～後期を4段階に設定し、段階ごとに土師器の様相を見た。本節では、各段階の位置づけと松山平野の古墳時代土師器の特徴について述べてみたい。

1段階を見ると、壺では直口壺や短頸壺といった小型品のみであり、土師器の主要器種としては、煮沸器である甕・把手付甕・甑と少量の高杯や椀という状況である。甕には、サイズから特大型、大型、中型、小型という4種類が見られるが、大型、中型、小型品が中心である。大型の甕は胴部が長胴化したものであり、中・小型の甕は胴部が球形あるいは長胴化が弱いものである。この段階の松山平野では、竪穴式住居跡で造り付け竈が多く見られことから、竈の使用と連動して甕における長胴化が進んだと考えられる。高杯には、以前から見られる深めの杯部をもつA類やB類、椀に脚部が付いた形状を呈するC類というように、種類も豊富である。

2段階以降になると、土師器は、甕・把手付甕・甑とはほぼ煮沸具に限定された状況となり、煮沸具ではない小型壺や高杯がほとんど見られなくなる。ごくまれに、直口壺や高杯が見られるものの、その数はごく少量である。そのような中で、祝谷アイリ遺跡では、竪穴式住居跡内から土師器高杯が出土している。ただ、この高杯は、竈の支柱に用いられており、煮沸を行うための道具あるいは祭器として使用されている。また、2段階になると、1段階に見られた特大型の甕が見られなくなり、長胴化した大型甕と胴部が球形を呈する中・小型甕というセット関係が成立している。これは3段階以降にも続いている。

4段階は、資料が少ないが、これまでとは製作方法の異なる甕A 6類の甕が登場し、様相が変わる。

次に土師器と須恵器との関係について見てみたい。各段階における主要な遺構における土師器と須恵器組成を、報告書掲載資料に基いてまとめた（表2）。これを見ると、2段階以降、土師器では甕を中心とした煮沸具が主体となることがよくわかる。1段階については、比較的良好な状況で出土している筋

表2 遺構における土師器・須恵器の組成比

時期	遺構名	土師器						須恵器					総計
		壺	甕	甗	高杯	椀	計	蓋杯	高杯	鉢・碗	壺・甕等	計	
1段階	樽味遺跡3次SC02	5	9	1	25	0	40点	1	0	0	2	3点	43点
		12	21	2	58	0	—	2	0	0	5	—	100%
1段階	筋違C遺跡SB-2	1	4	7	0	1	13点	6	9	0	2	17点	30点
		3	13	23	0	3	—	20	30	0	7	—	100%
2段階	開遺跡1次SB1	0	7	1	0	0	8点	2	1	0	0	3点	11点
		0	64	9	0	0	—	18	9	0	0	—	100%
3段階	下苅屋遺跡3次SB6	0	11	2	0	0	13点	12	3	1	0	16点	29点
		0	38	7	0	0	—	41	10	3	0	—	100%
3段階	桑原西稲葉遺跡4次 SC-283・284・285	1	4	2	0	0	7点	4	0	0	2	6点	13点
		8	31	15	0	0	—	31	0	0	15	—	100%

※報告書データを基に筆者作成

筋違C遺跡SB-2と樽味遺跡3次調査SC02を例に詳しく見てみたい。

筋違C遺跡は、松山平野東部に所在し、SB-2は主軸長6.6m、東西幅5.5mの長方形を呈する竪穴式住居である（栗田茂1996）。4本の主柱穴構造であり、造り付け竈を持つ。SB-2では、土師器として、煮沸具である土師器甕と小型壺と椀が出土しているが、土師器の高杯は見られない。須恵器では、蓋杯・高杯と壺が出土している。

樽味遺跡は、松山平野東部、石手川南岸に所在し、樽味遺跡3次調査SC02は、主軸長5.55m、東西長6.05mの長方形を呈する竪穴式住居跡である（田崎1997）。4本の主柱穴構造であり、造り付け竈をもつ。樽味遺跡3次調査SC02出土土器の組成を見ると、土師器では、甕と小型壺と高杯が出土している。須恵器では、蓋杯と壺・甕が数点出土している。

以上の2つの例は、土師器と須恵器を別々に見ると、様相が全く異なるように見える。しかし、土師器と須恵器という材質を越えて、器種別に見ると興味深い共通点が見られる。筋違C遺跡SB-2では、高杯が須恵器であり、樽味遺跡3次調査SC02では、高杯は土師器のみであるが、注目しておきたいのは、高杯の点数である。樽味遺跡3次調査SC02では、口縁部の点数だけで14点、全個体数で25点出土している。筋違C遺跡SB-2は、蓋杯と高杯との区別が難しいが、10点前後の存在は想定できよう。高杯が食器として使用されていたのか、祭器とし

て使用されていたのか不明ではあるが、須恵器の高杯と土師器の高杯が同じ目的で使用されていたことを示している。また、同時に須恵器と土師器の使い分けが、消費地において完全に区別できていなかったことを示している。

ところで、松山平野における須恵器生産は、古墳時代中期段階に、平野南部に所在する伊予市市場南組窯跡で非陶邑系の須恵器を焼成したことから始まる（長井1994、三吉2010）。消費地における共伴遺物の検討から、市場南組窯跡における須恵器生産の終焉時期については、本稿の1段階併行期あるいはその直前段階と考えられる。その後、確実に確認できる須恵器の窯跡は、6世紀中葉前後に操業していたと考えられる谷田2号窯跡である（阪本1982）。つまり本稿における1段階から2段階における須恵器生産の実態が不明となる。しかし、5世紀末に位置づけられる鶴ヶ峠古墳群などに見られる埴輪には、窯焼成のものが含まれていることから（栗田茂2007・2008）、この段階における窯業生産の技術が平野内で定着していても不思議ではない。1段階前後から陶邑系の須恵器生産が開始し、2段階では須恵器生産が継続的かどうかに関しては、検討の余地があるものの、安定した須恵器生産が行われていたとも考えられる。

これに関連して、松山平野では須恵器模倣の土師器が見られない⁴⁾。近年まで、西日本において須恵器模倣の土師器を対象として整理が行われることがなかったが、前述の第5回九州前方後円墳研究会などで検討されている（第5回九州前方後円墳研究会実行委員会編2002）。それによれば、須恵器模倣土師器は、南九州だけでなく、筑前・筑後や大分の一部・肥前・肥後・日向においても見られるという。

その中で注目したいのは、瀬戸内海にも面した豊前・豊後の状況である。大分県内における古墳時代中・後期の土師器を検討した中西武尚・服部真和（2002）は、日田・玖珠地域では、須恵器模倣の土師器が見られるものの、大分平野や豊前地域では須恵器模倣の土師器がほとんど見られないというように、地域単位で様相が異なることを指摘している。このことから、現時点では、松山平野を始めとした西部瀬戸内ならびに周辺地域では、須恵器模倣の土師器がほとんど見られないことになる。横山浩一（1959）が、須恵器を模倣した土師器に関

して、「須恵器の豊富にみいだされる畿内でおこなわれず、かえって須恵器の出土量のきわめてすくない関東でおこなわれたのは、興味深いことである。おそらく、須恵器の入手の困難さが、かえってそれにたいするあこがれをかきたてたのであろう」と指摘するように、須恵器模倣の土師器が、須恵器の不足を補うために製作されていたとするならば、須恵器模倣の土師器が見られない松山平野では、須恵器生産が比較的安定していたことを裏付けるものと言える。

須恵器模倣の土師器が見られないことに加えて、煮沸具である甕にも松山平野の特徴がある。

その特徴について述べる前に、まず、日本列島全体の状況についてふれておきたい。日本列島の5～7世紀の土器を検討した亀田修一（2003b）によると、東日本と西日本という東西の2つのグループに分けられるという。具体的には、西日本では、長胴甕や壺は丸底であり、甕の内面調整技法としてヘラケズリが一般的に見られ、移動式カマドが展開している。一方東日本では、基本的に移動式カマドは見られず、長胴甕や壺の底は平底のものが一般的で、甕の内面調整にヘラケズリはほとんど施されないという大きな違いがあることを指摘している。

本稿では、西部瀬戸内地域の1例として松山平野の状況を見たが、亀田の指摘通り、平底のものはなく、丸底のみである。本稿の2～3段階になると、甕の内面ヘラケズリ技法を施すものは少なくなり、刷毛目調整やナデ調整が多用されてくるものの、亀田の指摘を首肯する状況と言えよう。また、大型長胴甕と中・小型の球胴甕というセット関係も西日本に見られるものである。

以上のように、西日本の中で共通した点も見られるが、特異な点も見られる。口縁部が内湾し端部が肥厚する甕A1類が、古墳時代後期段階まで残る点である。

甕A1類は、その形状や調整手法から、布留式甕の影響を受けて松山平野で製作され始めた甕と考えられる。布留式甕の影響を受けて在地で製作された甕の状況について、他地域の状況を見てみよう。筑前・筑後地域の土師器を検討した重藤輝行（2009）によれば、本稿の甕A1類にあたる甕は、古墳時代中期

前葉に見られるだけで、後期まで残らない。大分県の古墳時代中・後期の土師器を検討した中西・服部（2002）は、大分県内でも大分平野、豊前、日田・玖珠の各地で地域性が見られることを指摘した上で、豊前地域では、口縁形状が内湾する甕が、本稿の1段階まで残ることを指摘している。吉備南部地域における古墳時代中・後期の土師器を検討した亀田（2003b）は、本稿の1段階に「甕の口縁部も直線的なものや外反するものが多くなる」と指摘し、2段階以降については言及されていないが、ほとんど残らないようである。大阪を中心とした畿内における古墳時代中・後期の土師器を検討した辻（1999）によると、本稿の1段階～3段階の前半にかけて「口縁部は内湾して立ち上がるものが少なくなり、外上方にまっすぐ延びるもの、あるいは外湾しながら延びるものが大半を占めるようになる」と指摘している。

以上をまとめると、筑前・筑後地域では古墳時代中期前葉に、豊前地域では古墳時代後期以降、口縁部が内湾する甕は見られなくなり、畿内では古墳時代中期末～後期にかけて徐々に少なくなるという状況であり、各地域で様相が異なっていることがわかる。

ひるがえって、松山平野の状況を見ると、古墳時代後期である2・3段階でも、甕A1類は残り続けている。4段階では、甕A1類が見られなくなるが、3段階までは確実に存在している。前述のように甕A1類は、布留式甕の影響を受けて製作が行われたものであるが、在地で独自の変遷をとげており、単なる外部の影響ではなく、地域が主体的に煮沸器として選択したものである。それと同時に、口縁部を内湾させる形状の甕を製作する伝統が長く受け継がれたと言える。これは松山平野の大きな特徴である。こういった現象の背景には、松山平野の地理的位置や周辺地域からの影響があると予想される。本稿では、現象の指摘にとどめ、この背景については別の機会に論じることとしたい。

結 語

本稿では、松山平野における古墳時代中期末～後期の土師器編年を示した

後、古墳時代後期土師器の特徴について私論を述べてきた。

古墳時代中期以降、須恵器と土師器という2種類の土器がある。須恵器に関しては、陶邑窯で生産された須恵器と同様の形態をした須恵器が全国各地から出土し、同時に陶邑窯で生産された須恵器と同様の時間的変遷をたどることから、陶邑窯と各地域との関係だけで見えてしまいがちである。一方の土師器は、研究が活発でないこともあり、須恵器と同様の視点で見えていないだろうか。本稿で見たように、一見すると斉一的な変遷の中であって、土師器における器種の選択や須恵器との違いに着目することにより、各地域の主体性が読み取れるのではないかと考えている。本稿では松山平野における現象の検討にとどまったが、周辺地域との関係や地域性の背景については今後の課題としたい。諸賢のご批判を頂ければ幸いである。

謝 辞

本稿をなすにあたり下記の方々ならびに機関にお世話になりました。記して感謝いたします。

梅木謙一、加島次郎、小玉亜紀子、水口あをい、愛媛大学埋蔵文化財調査室、松山市考古館、(財)松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター(順不

注

- 1) 以下「形土器」を省略する。
- 2) 辻町遺跡2次調査SX2では、TK23～47型式の須恵器しか出土していないが、SX2の遺物出土状況から、数回にわたる土器投棄の単位があると考えている。
- 3) 樽味遺跡7次調査は『樽味遺跡Ⅴ』愛媛大学埋蔵文化財調査室、近刊で正式報告予定である。本稿では報告書掲載予定の図面を提供いただいた。
- 4) 出作遺跡などではハソウを模倣したものが見られる(谷若編1993)。

参考文献

- 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編1991『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣出版
- 宇野隆夫「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新―律令制の食器様式の確立過程―」『日本考古学』第7号、日本考古学協会、1999年
- 梅木謙一編1992『祝谷アイリ遺跡』財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・真木潔1992「辻町遺跡」『朝美澤遺跡・辻町遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・宮内慎一1992「樽味立添遺跡」『桑原地区の遺跡』財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 亀田修一2003 a 「総説 古墳時代中・後期の土器」『考古資料大観第3巻 弥生・古墳時代 土器Ⅲ』小学館
- 亀田修一2003 b 「中国・四国地方の土器」『考古資料大観第3巻 弥生・古墳時代 土器Ⅲ』小学館
- 蔵本晋司2001「四国島における畿内系土器の動向（予察）」『庄内式土器研究』25、庄内式土器研究会
- 栗田茂敏1996「筋違C遺跡」『福音寺地区の遺跡―筋違C・D・E・F・G・H・I・川附―』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田正芳1996「Ⅷ 調査の成果と課題 2 古墳時代の遺物」『古照遺跡―第8・9次調査―』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏2007『鶴が峠遺跡Ⅰ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏2008『鶴が峠遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知・相原浩二1995『辻町遺跡―2次調査地―』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 河野史知2000「下苅屋遺跡3次調査地」『古市遺跡・下苅屋遺跡―2・3次調査―』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 小林善也・横山成己編2008『古墳時代集落遺跡出土の須恵器・土師器』山口考古学フォーラム
- 重藤輝行2009「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集 地域の考古学』
- 重藤輝行2010「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」『古文化談叢』第63集、九州古

文化研究会

阪本安光1982「2 谷田Ⅴ・Ⅵ遺跡（谷田1号、2号窯）」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）』愛媛県教育委員会

柴田昌児「第7章考察 第7節 古墳時代中期の土器様相に関する予察」『久枝遺跡・久枝Ⅱ遺跡・本郷Ⅰ遺跡 埋蔵文化財調査報告書』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター、2005年

第5回九州前方後円墳研究会実行委員会編2002『第5回 九州前方後円墳研究会発表要旨集 古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』九州前方後円墳研究会

高尾和長編1998『大峰ヶ台遺跡Ⅱ—9次調査—』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

田川憲2004「第3節 大柿遺跡出土の土師器の編年について」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告24 大柿遺跡Ⅱ（第5分冊 分析編）』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団

武正良浩2003『福音小学校構内遺跡Ⅱ—古墳時代以降編—』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

田崎博之1996「四国・瀬戸内における木製食事具・容器の変遷と画期」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器 第Ⅰ分冊 発表要旨』埋蔵文化財研究会第39回研究集会実行委員会

田崎博之2004「00202 農学部2号館改修工事に伴う調査（樽味遺跡7次調査）」

『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報—2001・2002年度—』愛媛大学埋蔵文化財調査室

田崎博之編1997『樽味遺跡Ⅲ—樽味遺跡3次調査報告—』愛媛大学埋蔵文化財調査室

田崎博之編2004『文京遺跡Ⅲ—文京遺跡13次調査報告—』愛媛大学埋蔵文化財調査室

田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

谷若倫郎編1993『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会

辻美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室

寺沢薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会

長井数秋1994「伊豫市市場南組窯跡出土の須恵器」『ソーシャル・リサーチ』第20号、ソーシャル・リサーチ研究会

中西武尚・服部真和2002「古墳時代中・後期の土師器—大分県—」『第5回 九州前方後円墳研究会発表要旨集 古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』九州前方後円墳研究会

三 吉 秀 充

- 西弘海1979「西日本の土師器」『世界陶磁全集 2 日本古代』小学館
- 西弘海1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 西口寿生1983「土師器の地域色—6・7世紀の畿内とその周辺—」『文化財論叢—奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集』同朋社
- 橋本雄一1994『北久米浄蓮寺遺跡～3次調査地～』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 光江章1993「IV遺物 1. 土師器」『出作遺跡 I』松前町教育委員会
- 宮内慎一1996「開遺跡 1次調査地」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 宮崎泰好1993「麻生小学校南遺跡第2次調査」『砥部町内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』愛媛県砥部町教育委員会
- 宮本一夫編1989『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 三吉秀充2010「伊予市市場南組窯跡の研究」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編第28号』
- 横山浩一1959「手工業生産の発展—土師器と須恵器」『世界考古学大系 第3巻日本Ⅲ・古墳時代』平凡社
- 吉田広編2005『文京遺跡Ⅳ』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 吉田広・三吉秀充・上山喜也2003「V 桑原西稲葉遺跡 3～5次（北吉井団地）調査」『樽味遺跡Ⅳ—樽味遺跡 4次調査・樽味遺跡 5次調査・桑原西稲葉遺跡 3～5次（北吉井団地）調査—』愛媛大学埋蔵文化財調査室

挿図出典

図1- 1・図2-5は筆者原図。図1-2・図2-22吉田2005、図1-3、図2-30・31・35・37吉田・三吉・上山2003、図1- 4 橋本1994、図2-1・2・12梅木・真木1992、図2-3・4・6・16～20田崎編1997、図2-7・13～15栗田1996、図2-8高尾編1998、図2-11・21河野・相原1995、図2-10・23・25・26・29田崎編2004、図2-27・34宮崎1993、図2-28梅木・宮内1992、図2-33宮本編1989、図2-36宮内1996、図2-38梅木1992から転載。図2-9河野・相原1995に一部加筆。表1・表2は筆者作成。